

関西大学工学部化学工学科（現・環境都市工学部エネルギー・環境工学科）

2019.5.28.発行

## 第 25 回 同 窓 会 報

〒564-8680 吹田市山手町 3-3-35

TEL06-6368-1121

同窓会編集委員会 発行

### <<< 巻 頭 言 >>>



#### 「卒業生のある一言」

エネルギー・環境工学科 教授 平成30年度教育主任  
村山 憲弘

高校半ばまでを過ごした「昭和」に続き、いつの間にか慣れ親しんだ「平成」もおよそ1か月で終わりを迎える。新元号「令和」が発表された4月1日にこの原稿を執筆している。平成最後の卒業生、修了生として、先月、エネルギー・環境工学科から学士（工学）90名、修士（工学）23名、博士（工学）1名が輩出された。学科教員一同、今後のご活躍を願うばかりである。

東京オリンピック関連の工事もピークを過ぎ、国内景気は後退気味との見方もある。幸い、大学生の就職活動は売り手市場の状態が続いている。学生諸君の健闘もあり、平成30年度の当学科の就職状況は良好であった。化工技術者のニーズを裏付ける一面とも考えたい。ところで、化学工場の現場で即座に的確な判断や対処ができる化工技術者に対して、そう簡単にAIがとって代わることはできない、という私見を持っている。このような見方は、もはや時代遅れの妄想に過ぎないのだろうか。ご活躍されている卒業生の皆様からのご意見が頂ければ有難いことである。

卒業生の一言がきっかけとなり、最近、「know-why」というキーワードを学生に言うようになった。「原因、目的、意味を考えること」の重要性を説く語と私は捉えている。2か月ほど前、卒業生がリクルーターとして研究室を訪問してくれた。「物事には理由がある」との先輩社員の言葉を肝に銘じて、日々の仕事に励んでいるそうだ。研究室を巣立って日が浅いにもかかわらず、社会人としての成長ぶりを感じ取ることができた。同時に、あらためて自身が考えさせられる機会でもあった。新入社員同然の卒業生からの言葉であるがゆえ、何とも新鮮であったことを覚えている。似たような言葉はこれまでに何度も耳にしてきた。私自身が学生に言ったこともある。もし、私と年齢の近い卒業生が発した言葉であれば、心に残らなかったであろう。

上手くいったことや思い通りになったこと、あるいは、失敗したことや予想が外れたことには、必ずそれぞれの理由、原因がある。後者の場合、失敗を成功の基とするためには、その原因の究明が必須であること

は言うまでもない。もちろん、理由を明らかにできるかどうかは別の問題である。理由も一つだけとは限らないし、時とともに変わることさえある。自分ではどうにも対処できない原因に行きつくかもしれない。難しい仕事であればあるほど、「言うは易く行ふは難し」であろう。

それでも、「know-why」の姿勢そのものが重要であることに変わりはない。学生に向けて、「know-how」以上に「know-why」も大切にしたいと説いている。理由や目的を「正しく、客観的に」理解することもまた重要である。恥を忍んで言えば、私の場合、曲解・誤解してしまうことがしばしばである。目的と手段の逆転に気が付かないことがある。無意識のうちに私情をはさんでいることもある。そう考えると、つい忙しさにかまけて、やっつけ仕事や前例の鵜呑みで処理してしまいがちな自身の仕事ぶり（それこそ AI 化の対象である）を、今一度見直さねばならない。肝に銘じる必要性が高いのは、先の卒業生よりも、今の自分自身であることを突き付けられた思いである。多忙な教育主任の役目を終えた翌日に、重圧からの解放感に浸りながらも、卒業生の一言に端を発して考えさせられたことを綴った次第である。

化学工学科、エネルギー・環境工学科の卒業生の皆様におかれましては、今後のご健勝を祈念致します。

-----

## <<< 卒業生に聞く >>>



### 「学生時代の研究テーマの実用化を目指して」

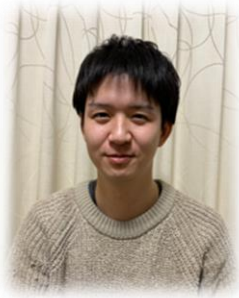
平成 19 年修士卒・三宅（義）研究室  
 平成 30 年博士卒（社会人）・山本研究室  
 日立造船株式会社  
 今坂 怜史

私は、日立造船株式会社に平成 20 年に入社し、今年で 10 年目になります。以来、技術開発本部に配属され、研究開発の業務に携わってきました。入社後 4 年間は、カーボンナノチューブ（CNT）の量産技術開発を担当し、現在は学生時代の研究テーマであったゼオライト分離膜の技術開発および事業開発に従事しております。その間、社外や海外から一人前の研究員、エンジニアとして認められたく博士号取得への意思が強くなり、平成 27 年に当時会社の先輩であった荒木先生を頼り、社会人博士課程にて関西大学に戻りました。博士課程では山本先生のご指導をいただき、平成 30 年に学位を取得することが出来ました。修士課程では三宅義和先生に研究開発の楽しさ・素晴らしさを、博士課程では山本先生、荒木先生に実用的な開発理念について学ぶことができました。自らで将来の会社を支える核となる技術を創出し、これまでの概念を覆すような事業を立ち上げられるような人材になりたいと考えております。

当社のゼオライト膜開発は製品化を終え、事業化を推進している段階にあります。修士課程で研究していた分離膜が 10 年の時を経て、実用化を検討できるレベルにあることにとっても幸せを感じております。現在、海外での事業展開を目指し、各国にて技術提案、受注対応を行っています。膜分離プロセスは、膜の素材開発は勿論ですが、流体、伝熱、蒸留などあらゆる単位操作が必要とされます。今思うと、

関西大学にて、化学工学を専攻して本当に良かったと思います。そして、当社では、材料開発からプロセス開発まで行うことの出来る人材は少なく、貴重な人材になれるように頑張りたいです。

最後に、自身で開発した膜分離プラントを実用化させ、世界中に普及するように、引き続き事業化を推進していきます。関西大学で学んだ教えに従い、社会に役立つ価値を生み出せるよう、精進いたします。



## 「社会人 4 年目を終えて」

平成 27 年学部卒・岡田研究室

矢崎部品(株)

松本 侑大

私は 2015 年 3 月関西大学を卒業後、同年 4 月より矢崎部品株式会社で働き始め、はや 4 年が経ちました。4 年が経過した今でも、まだまだ未熟で日々勉強といった感じで仕事をしています。

弊社では、自動車部品であるワイヤーハーネスという部品を作っている会社です。ワイヤーハーネスとは、部品と部品をつなぐ電線の束のことを言います。人間で例えると、血管や神経のようなものです。なかなか馴染みのない部品ですが、自動車を作る上では重要な部品となります。

私は現在、開発設計部に所属しています。業務内容は、ワイヤーハーネスの図面を作成することが主となります。その業務の中で、私は回路設計を担当しています。回路設計とは、電源を部品にどのように分配するか設計したり、部品間を繋ぐ電線の種類を設計したりしています。ワイヤーハーネスを構成している電線は何百本とあり、それぞれの電線を繋ぐ行き先を考えるのですが、1 本でも行き先を間違えてしまうと、補器がきちんと作動しなくなってしまいます。ミスが許されず、責任感が大きな仕事です。

矢崎に入社して、海外の方と触れ合う機会がとて多くなりました。入社 1 年目の製造研修では、ベトナム人の方と一緒にラインに立ち、ワイヤーハーネスの製造に携りました。また現在は、インド人の方と一緒に開発業務をしています。いろんな国の方と働くことによって、様々な考え方や仕事の取組み方を知ることができ、いろいろな角度から物事を見る力が養うことができます。また仕事だけでなく、プライベートでも一緒に花見に行ったり、飲みに行ったりと、その国の食や文化を直に経験でき、とても貴重な経験を積むことができます。

大学卒業後は大阪を離れ、静岡で暮らし始めました。最初は慣れない土地で不安も少しありましたが、今では先輩方によくしていただき、プライベートも充実しています。仕事も、プライベートも充実できるよう、これからも向上心を持って仕事に取り組んでいきたいと思っています。



## 「社会人 3 年目を終えて」

平成 29 年修士卒 小田・中川研究室

ヤマハ発動機 (株)

程 冉冉

私は 2011 年 4 月に環境都市工学部エネルギー環境工学科に入学し、研究室はエネルギー材料研究室に所属して大学 4 回生から修士まで 3 年間で過ごしました。研究室での生活では論文データ、学会発表のため夜までデータ整理したことを今懐かしく思います。また毎日午後 4 時ごろに研究室の仲間たちとコーヒーじゃんけん、毎年の新年会と飛鳥中間発表をしたこともよい思い出です。エネルギー材料研究室を選んだ理由は、私の出身は中国の石炭資源豊富な山西省なので、研究するなら炭素を切り口にして環境改善に活かせる技術を取得したい考えたことが一つと、もう一つの理由は入学通知書に当時学部長の小田先生の署名が入っていたためです。私はこれも縁だと感じています。そして、現在はヤマハ発動機のモビリティ技術本部 EM 開発統括部に所属し、電動車両用電源システムの先行開発をしています。ここでは、大学で研究してきた蓄電デバイスの炭素材の知識も活かせる仕事をしています。

中国でよく言われることわざに「一日為師、終身為父 (一日師たれば、終身父たり)」というものがあり、「一日だけでも先生に教わっていたことがあったら、一生父親のように尊敬すべき」とのことです。小田先生と中川先生より炭素、キャパシタなどの専門知識の教えを含め、国内外の学会での発表機会や炭素材料学会のスタッフとして参加する機会も与えていただきました。これらを通じて世界の専門家と交流を持つことができたことや人脈を広げられたことまで色々刺激を受けたことは今でも貴重な経験となっています。

これまでの私の人間関係は良好で当時の先生と仲間たちとの間の雰囲気と現在の上司とグループメンバーたちの間の雰囲気が非常によく似ているかと思います。私は家族から離れて生活しているのですが、この研究室あるいは部署は私の大家族と感じていて、来日から今までの数年間、非常に幸せに思います。

社会人になってからは、静岡県で生活していますが、週末は車で県内を観光することや近くの山に MTB でサイクリングするなどして過ごしています。学生時代にもっとスポーツや筋トレをやればよかったかと思います。それは如何にいいアイデアがあっても良好な体力がないと実現できないからです。

最後に、日々何度も研究室に熱心にご指導して下さった小田先生、中川先生に感謝を申し上げます。小田先生の最後の学生であったこと、中川先生一人体制の研究室の最初の学生であったことを誇りに思います。そして、研究室の仲間たち、大学の教員の皆様にも感謝を申し上げます。今後、エネルギー材料研究室の卒業生の誇りをもって、エンジニアとして幅広く知識を吸収し、経験を積んで会社、社会へ貢献していきたいと思っています。

-----

## <<< 学生の窓 >>>



### 「6年間の研究生活」

平成 31 年 博士卒・池永研究室

清川 貴康

私は、2010 年 4 月に関西大学に入学し、博士課程後期課程を修了するまでの 9 年間を関西大学で過ごしました。中でも、研究に携わった 6 年間は私自身にとって、特に濃密な時間を過ごせたと思います。

研究室に配属当初は、わけもわからず右往左往していました。ただ、今まで研究というものを想像すらしていなかったため、毎日が刺激的であったことを良く覚えています。新しい発見もたくさんあり、研究にのめり込んでいくのに、さほど時間を要さなかったと思います。日に日にできることも増え、結果が出ることを純粋に楽しんでいました。

大学院では、徐々に先生や先輩方と研究の内容について議論できるようになり、より深く研究に向き合うことができました。ただ楽しむだけでなく、研究についての本当の面白さ、奥深さを学んでいけたと思います。また、専門的な知識や技術以外にも多くのことを学び、様々な経験をさせていただきました。国内外の学会発表等では、世界の広さ、自身の未熟さを知る良い機会であり、良い刺激をもらえました。特に、国際会議における口頭発表が最も良い経験だったと思います。精神面が鍛えられました。

このように、私は本当に充実した 6 年間の研究生活を送ることができました。先生方をはじめ、先輩方、同輩、後輩達に恵まれ、多くの方々からの指導や支えがあったからこそだと思います。この場を借りて、お礼申し上げます。本当にありがとうございました。また、研究のことだけでなく、普段の些細なこと、くだらないことに付き合ってくくださった方々にも大変感謝しております。私個人としてですが、日々の何気ない、くだらないコミュニケーションがあったからこそ、ここまでやってこられたのだと思っています。今、研究室に所属している方も、日々の何気ないコミュニケーションを大切にしてみてください。きっと毎日、笑顔で過ごすことができると思います。

この 4 月から新天地にて、研究に携わっていきます。今まで行ってきた分野とは異なるため、不安な気持ちもありますが、日々精進して研究活動に励んでいきたいと思っています。

最後になりますが、今後の皆様のご健康とご多幸をお祈りいたします。

-----

## 「学生生活の集大成」

平成 31 年学士卒・田中研究室

西澤 茉奈美

2015年の春、エネルギー・環境工学科に入学しました。環境に関することを学びたいという漠然な考えしかなかったのですが、そんな中でも1つ決めていたことがあります。それは勉強だけでなく私生活も含めた全てにおいて「何事にも妥協しない、全力で取り組む」ということです。学生生活外では4年間ボランティア活動に力を注いでいました。今しかできないことに全力を注ぎ、たくさんの人と様々な経験を通して成長したいと思い活動していました。そんな私ですが決して要領よく物事をこなせたわけではありません。時間がかかった時もあり、質より量になっていた時もあったと思います。しかし、その時その時に自分ができるベストな道を選んできたと思っているので後悔はありません。

学生生活を振り返ってみると、1～3年次は授業についていながらノートをとるので必死になったり、レポートや課題に追われる毎日でした。4年次になってからは就職活動との両立や、研究に対し計画を立て主体的に取り組むことがなかなかできませんでした。しかし、1つのテーマに対し様々な視点から物事を考え、実行し、振り返り、原因を考え成果を相手に伝えることの難しさを学ぶことができ、物事の本質的な考え方を学びました。

ここで過ごした4年間は今となってはほんの一瞬で、入学式はついこの前のように感じます。そんな私の学生生活に欠かすことができないのは友人であり、先生であり、そして家族です。何気ない毎日を共に過ごし、笑い、悩み、励まし、いつもそばにいてくれたたくさんの友人。勉強や研究の指導だけでなくどんなことにも親身になって寄り添って下さり、背中を押して下さった先生方。22年間自由にのびのびと育ててくれ、そして絶対に1番の味方になって守ってくれた家族。学生生活を充実してこれたのはたくさんの方々のおかげがあってこそだと思います。一生の宝物で社会に出てもこのつながりを大切にしていきたいと思っています。

この春から私は社会人になります。これから迎える毎日は、これまでの学生生活以上に責任が求められる学ぶことでいっぱいになると思います。わからないからといって受け身になるのではなく、物事の本質を考えて、主体的に行動し1つでも多く自分の力にしていきたいと思っています。4年間で学んだことを活かし、日々成長を求めていきます。そして、1人の人として責任感を持ち、やると決めたことには全力で取り組み、私らしく過ごしていきます。

最後になりましたが、ご指導いただきました先生方をはじめ、私を支えてくださったすべての方に心から御礼申し上げます。みなさんに出会えたことを誇りに思います。またお会いできることを楽しみにしています。



## &lt;&lt;&lt; 教室便り &gt;&gt;&gt;



## 「ヨーロッパ滞在記」

環境都市工学部 エネルギー・環境工学科 教授  
三宅 孝典

化学工学科、エネルギー・環境工学科の卒業生、修了生の皆さん、お元気にご活躍のことと思います。昨年、関西大学の学術研究員として7月初旬から約二ヵ月間、欧州での学会に参加し、また、いくつかの大学を訪問してきましたので、その様子や感じたことなどをお伝えしたいと思います。

出発は今年の7月7日の予定でした。その前日には、あちこちで豪雨災害がありました。広島県の呉市でも大きな災害がありましたし、岡山県倉敷市の真備町では、小田川の決壊で町の多くが水没し大変な被害が出ました。関西でも道路が通行止めになったり、電車が運転を見合わせたりしていました。私のお発便は7日の10時30分で、京都からリムジンバスで行くことにしていました。しかし、7日のリムジンバスや鉄道の運行が心配でしたので、一日早めて関西空港に行くことにしました。幸い、雨が少し落ち着いてきてリムジンバスの運行が再開されたことを知り、急いで家を出ました。関西空港には夜の8時頃に着き、簡易宿泊施設で一晩過ごそうと考えましたが、皆考えることは同じで既にどこも満室で、仕方なく空港ロビーの長いすで一晩過ごしました。長旅前のいきなりの予期せぬ出来事であり、また、いくつかの訪問先の日時が確定しておらず、二週間ほどの宿が未定だったので、先々に対する漠然とした不安の中での出発となりました。

欧州での最初の行事は、ベルギーのルーバン大学での国際会議でした。Louvain-La-Neuve という町にあり、関西大学と提携をしている Katholique University of Leuven (KU ルーバン大学) とは別のルーバン大学です。どちらも日本ではルーバン大学と言われますが、元々は一つの大学で、オランダ語圏とフランス語圏の情動的な課題があり、La-Neuveの方が分かれてきたように聞いています。学会は、触媒の調製に関するもので、欧州の研究者が中心の伝統のある学会です。日本からも主に大学から二十人くらいの参加者がありました。学会期間中は、日本人同士が集まり行動を共にしがちになります。特に食事の時にレストランで一人で食事をとるのが、私には間が持たないと、メニューを見てもどんな料理なのかが分からないので、日本人どうしでの食事は助かりました。学会発表そのものは、日本の学会の方が総じて進んでいるように思いました。欧州の人たちは、基礎的なこと、論理性を大事にし、自分を主張している感じがしました。ここには、Michel Devillers 先生がおられ、彼とは15年を超えるつきあいがあり、再会を喜びあいました。今は、副学長をされておられ、研究者ではなくなってしまったと少し寂しそうな様子でした。

次は、パリの Sorbonne 大学に Catherine Louis 先生を訪ねました。大学は、最近大きな火災があったノートルダム大聖堂の川向にあります。先生にセミナーをやってくれと言われ、あまり大きくはない部屋でしたが30人位を前にしてアルコールの脱水素に関する講演を行いました。結構質問があったので、理解しようとしてくれている姿勢を感じました。Catherine 先生の所には、日本から勉強に来ておられる若い助教の方がおられ、色々助けていただきました。もちろん多くの国から学位を取得すべく学

生が集まっています、中国からの学生もいました。

その次に、プラハの **Jiri Cejka** 先生を訪ねました（写真1）。チェコのみではなく、欧州ではゼオライト触媒で非常に有名な先生です。大学で大きなプロジェクトを始めたところで、海外から3名の研究者を共同研究者として選ぶとのことで、ちょうど私がいた日にアメリカの大学の先生のプレゼンテーションがありました。一緒に聞くかと誘われましたので、触媒の話でもあり断る理由もなかったので参加させてもらいました。酸素を活性化して、プロピレンから直接プロピレンオキシドを合成する反応で、かつて経験していた反応だったので興味深く拝聴しました。1時間弱の講演の後、質疑があり、おおよそ質疑が終わりかけた折に、もう質問はありませんかとのことでしたので、部外者だけど質問していいかと聞いたところ構わないとのことでしたので、質問させてもらいました。酸素の活性化で二種類の原子状酸素が生成し、一方がほぼ定量的に目的生成物を与えるということだったので、それなら残った方の酸素種は非選択的な生成物を与えると思うのに、なぜ100%近い選択性が出るのかを聞きました。日本では躊躇して質問しなかったかもしれませんが、環境・雰囲気の後押しがあった気がします。部屋に戻り **Jiri** 先生と話をした折に、低い転化率なら選択性が出るかもしれないが、実用性からは程遠いのでどうかと思うというようなことをおっしゃっておられました。面白い経験でした。その後、**Jiri** 先生からは、欧州での若い学生や研究者向けの講習会などの案内をたくさんいただいています、なかなか日本から学生を参加させることもできないので、苦慮しています。**Jiri** 先生の所にも多くの学生が国外から来ていて、中国からも勉強に来ている学生がいました。



Jiri 先生の校舎にて

次に訪問したのは、ケルンの **Matthias Eisenach** 先生です。新進気鋭の先生です。ケルンと言っても、電車で20分ほど離れた **Leverkusen** という町に研究施設があります。ここはかつてバイエル **Bayer** の工場があった場所で、20年近く前に訪れたことがある場所だったので大変感慨の深い訪問になりました。若い先生の研究室なので、**Matthias** 先生を含め全部で5人で実用性を考えた研究をしているとのことでした。互いの研究について説明した後で、何か共同でできないかと言う話になり、部分水素化を一緒に検討しようということになりました。帰国後に、関西大学で調製したサンプルを送って、今、ドイツの方で評価してくれています。



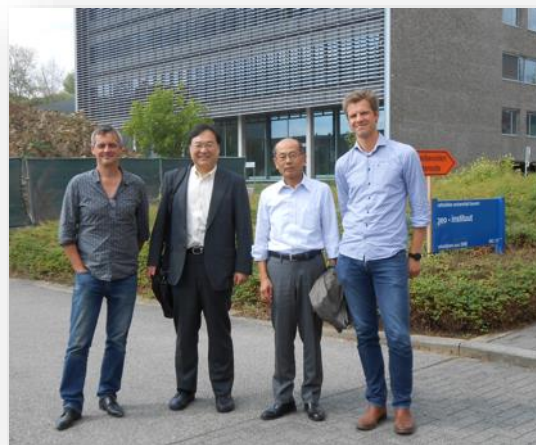
Matthias 先生(左端)と研究室メンバー

次に、ビー・エー・エス・エフ（バspf **BASF**）にいる四半世紀にわたる友人を訪問しました。**BASF** は、世界の最大手の化学会社です。友人は研究部門の **No.2** にまで偉くなっていて、何か若い研究者にしゃべってくれと言われたので、金属有機構造体 **MOF** によるキシレン混合物からのパラキシレンの分



離について話をしました。10人に満たない研究者でしたが、熱心に話を聞いてくれました。欧州では、研究者と言えばほとんどみな博士号を持った人たちです。やはり、色々な質問をしてくれ、新しい知識を得ようと積極的だなと感じました。

次は、KU ルーバン大学に Dirk De Vos 先生を訪ねました。Vos 先生は、数年前に関西大学に来られ、その折に互いの研究を紹介しあう中で、かなり近い研究内容だったので縁ができました。ここでは学生と共同の部屋を使わせてもらうことになり、ベルギー出身ではない二人の博士課程の学生と同じ部屋で、研究とは関係ない色々な話を楽しみました。Vos 先生の研究室でも中国からの学生は見かけましたが、日本人の学生はいないようでした。また、ここでもセミナーを依頼され、Vos 先生も精力的に MOF の研究をされておられるので、MOF によるキシレンの分離の話をしました。どこに行っても結構質問が来るので、やりがいを感じるとともに、日本だったらどうかなとの思いもありました。また、たまたま東京大学の久保先生が来られ、ゼオライトに関する講演会を聴講する機会に恵まれました。このような出会いの多い二ヵ月でした。世界から多くの研究者が来て講演があり、学生たちは知らず知らずのうちに先端技術に触れるとともに国際感覚を養っていくのだらうと思いました。日本ではこのような環境を提供するのが難しいものの、少しでも機会を作ればと感じました。KU ルーバン大学は 600 年近くの歴史のあるベルギー最古の大学です。また、街そのものが歴史の中にある感じです。小さな町で人口は約 10 万人で、そのうち約半分が学生と言う大学と学生の街です。大学の文系学部は街中にあり、理系学部は少し郊外にあります。KU ルーバン大学には、関西大学の関係者が常駐していて、今回も大変お世話になりました。異国の地に頼れる方がいるというのは、本当に心強く思いました。滞在の最後に、お世話になったので Vos 先生にお昼をごちそうすると申し出ましたが、わざわざ来てくれたので私がごちそうすると言って逆にごちそうになってしまいました。先生が、レストランは大学から少し離れているので自転車で行こうと思うが、自転車に乗れるかと聞かれました。ベルギーやオランダの人は背が高く、自転車もサドルの位置がずいぶん高いので少し危惧しましたがなんとか大丈夫でした。お昼ご飯が終わって少し時間があつたので、自転車を使っていいよと言われたため、付近をあちこち走っていました。ふと気が付くと街の中心の教会に着き、バスで毎日往復していましたが、案外近いということ初めて認識しました。風を感じながらのんびりとした開放的な時間でした。ルーバン大学滞在の途中には休日があつたので、常駐している方に聞いて勧められた Mechelen という町に出かけました。その二番目に大きい教会に、キリストを抱いた聖母マリアの像がありました。それが腰の高さ位の木製のフェンスを隔てて手の届くところにあり、とても印象的でした。写真を撮ろうという気にはとてもなれない、すごくリアルな像でした。



KU ルーバン大学 大久保先生と

最後に、ブルガリアのソフィアでの国際会議に参加しました。ここは、2005 年の別の国際会議で来たことのある街で、もう一度来たかったということもあり最後の訪問地としました。この学会は、かつて自由主義圏と共産圏という時代に、両方の人たちが参加できる国で開催するということでブルガリア・ソフィアになったそうです。あまり大きな学会ではないので、日本からの参加者も 10 名程度と少な

ったのですが、限られた人数だからこそ仲間意識は高まった気がします。日本の触媒学会の会長(当時)である北海道大学の福岡先生も来られており、懇親会では乞われて民族衣装でダンスを踊らされておられました。楽しそうに踊られ、日本人仲間も皆にこやかに見えていました。私の講演は最終日の午後に組み込まれていました。おそらく会議実行委員会は、当初はそれほど多くの発表があるとは思っていなくて、最終日の午前中にすべてのセッションが終わると思っていたのだと思います。このため、Excursion が最終日の午後から始まり、私の講演の時には 10 数名の聴講と言う少し寂しい人数でした。国際会議の発表では、最初に学会関係者に謝辞を述べますが、それに加えて、たくさんの同僚が Excursion に出かけている中、私の講演を聞いてくれてありがとうと始めると、一気に場が和みました。多くの質問があり、温かい雰囲気の中で講演をすることができ、それなりの充実感でした。会議が終わった翌々日が帰国の日でしたので、1 日自由な時間がありました。2005 年の会議の折に知り合いになった方が Seven Rila Lakes という観光地に連れて行ってくれることになり、氷河の残る雄大な山々を前に、思い出深い二ヵ月間を振り返りました。

今回の学術研究員としての約二ヵ月間で、国際会議や各地の大学を訪問し、色々な人と出会いました。しんどいことも多々ありましたが、結局何とかなるという気持ちになれたのが一番の収穫かも知れません。色々な人に助けてもらい、自分から行動を起こせば周りの人が応えてくれると言うことを感じました。一人なので自分で何とかしなければ何ともならないという切迫感が背中を押したのだと思います。

また、各地を回りましたが、欧州の大学に日本人の学生や研究者がほとんどいないことが気になりました。それとは対照的に、多くの大学で中国からの留学生に会いました。かつて日本の志のある若い人は、アメリカや欧州に留学して行ったと思います。知識とともに人脈も築いて帰国し、日本の目覚ましい発展の一因になったように思います。そういう意味では、日本を出たがらない、温もりのある殻を破りたくない今の状況で、これから先に日本が世界と伍していく中で大丈夫だろうかと言う心配をもちました。

卒業生の皆さんにおかれましては、難しいことではありますが、勇気をもって是非自分から一步を踏み出していただきたいと思います。そうすれば明日は必ず開けるように思います。

最後になりましたが、皆さんのご健勝と益々のご活躍を祈念いたします。

-----

■ 三宅孝典教授が在外研究（欧州）から帰国

三宅先生が約 2 か月の在外研究（ベルギー（ルーバン大学）等）を終えて、平成 30 年 9 月に無事帰国されました。

■ 田中俊輔准教授が教授に昇任

平成 31 年 4 月より田中先生が教授に昇任されました。

■ 応用化学科教室だより

2019 年度の応用化学コース長は石川正司教授、またバイオ分子コース長は宮田隆志教授です。キャリア担当は、大洞康嗣教授と川崎英也教授（応用化学コース担当）ならびに柿木佐知朗准教授と中井美早紀准教授（バイオ分子コース担当）です。

学科のホームページ（<http://www.chemmater.kansai-u.ac.jp/>）で、最新情報の詳細を確認することができます。

〇〇〇 編集後記 〇〇〇

第 25 回同窓会誌をお届け致します。「巻頭言」を学科教育主任の村山憲弘教授にお願い致しました。「卒業生に聞く」では、程氏、松本氏と今坂氏より原稿を頂戴しました。学生からは、清川氏と西澤氏より原稿を頂きました。「教室便り」では、三宅孝典教授より在外研究についてご報告頂きました。ご多忙の折、原稿の執筆にご協力頂いた皆様方に厚く御礼申し上げます。